

第2章 厳しい試練の大正時代

関東大震災と油問屋

大正12年9月1日に起きた関東大震災（マグニチュード7.9）は未曾有の災害を東京にもたらしたが、油問屋にも多大な影響を与えた。東京における油問屋の地図が一変したといっても過言ではない。

大震災の起きたのが9月だったことも油問屋にとっては不運であった。春に収穫される菜種は夏場に搾油され、9月という時期はちょうどなたね油が出回る旬の時期で、各油問屋は大量のなたね油を仕入れるのを常としていた。大豆油はまだ認知を受けているとはいいがたく、なたね油に匹敵する食用油がなく、なたね油が暴落する危険はほとんどなかった。逆に年末からの端境期には値上がりすることが常であったので、沢山仕入れれば仕入れるほど儲けも大きくなり、資金力と在庫能力のある問屋は腹一杯仕入れた。

そのため、油問屋が受けた打撃は極めて大きかった。多くの問屋が在庫を失うとともに、取引先の罹災により売掛金の回収ができなくなるなど大きな被害を受けた。

江戸時代から続いていた最大手の油問屋大孫商店は、2万箱（1斗缶4万缶）の在庫を一瞬のうちに消失した。

カク石・駿河屋喜平次商店も江戸時代からの大店で、大正時代には代が替わり駿河屋藤田金之助商店となっていたが、やはり大震災で大きな被害を受けた。当時倉庫は満杯で、伊勢水や摂津製油の菜種油、あるいはローソクなどを全て消失した。このカク石全滅の報せを受けた摂津製油では、直ちにゴマ油、菜種油を本船で送り、油が斛で日本銀行わきの銭瓶橋に荷揚げされた。同業者や仲

買は争ってこの油を購入し、カク石は再建されたとの話が伝わっている。

京橋霊岸町のカネカ・伊勢屋鈴木嘉助商店は、2,000箱（4,000缶）の油を倉庫に入れていた。火災は免れたが、箱が地震で崩れ落ち缶から油が洩れ出し、倉庫内に深さ45cmの油の池ができてしまったという。

大きな損害を受けたものの、多くの問屋は震災後時を経ずして仮建設で開店にこぎつけた。一方で、受けた被害が余りにも大きく、このため閉店に追い込まれる問屋や、支配人に営業権を譲って引退する営業人が輩出した。大手問屋の実力が著しく後退したのは否めず、一方で小売や仲買、あるいは中小問屋で被害が少なかったところは、震災を転機にぐんぐん力を付けていった。地方からの新たな参入も続いた。

現在の東京油問屋市場の有力営業人には、関東大震災で幸運にも被災を免れたか、被災が最小限に止まったところ、あるいは震災後に東京に進出したところ、そして震災後に営業を開始したところが多くを占めている。

塗り替わった油問屋の地図

関東大震災で幸運にも被害が少なく、逆にこれを機に力をつけ、大問屋への道をまっしぐらに進んだところもある。館野栄吉商店は震災の起きる前年3月から豊年製油の大豆油販売を開始したが、このことが震災後の復旧に力を発揮することとなった。創業99年を記念して館野がまとめた「白寿の履歴書」では、当時の状況について以下のようにまとめている。

「震災に依り関東一円の植物油（食用）は罹災在庫払底を来した処、館野栄吉（2代目）店主の英断により大豆油200屯（12,000缶）を豊年製油清水工場より帆船にて急送。原価に近い価格で販売し東京の食糧危機救済の一端を担うと共に、之れが契機となって従来市場で白眼視されていた大豆油普及の端緒となる」

池田屋商店の山崎権治郎も思い出を語っている。

「胡麻油が非常によく売れるので店の古い人に沢山の現金を持たせ、岩井製油や岩槻の製油工場に、遠くは福島県桑折の日ノ丸製油にまで胡麻油を買いに出しました。荷が到着を待ち切れないうに、油は飛ぶように売れました。遠く神奈川の保土ヶ谷あたりから車を引っ張って、胡麻油を取りにきた油屋さんもありました」（「走馬燈」山崎権治郎述）

また、地方の有力問屋が震災後の東京に油を供給すると同時に、東京に店を

出し地盤を作るという動きも活発になった。

甲府の財閥であった穴水嘉三郎商店（明治5年創業）は、石油の将来性に着目して大きな需要を期待できる東京への進出を図った。震災の翌年、穴水要七社長（後に貴族院議員）の弟穴水嘉三郎が芝新堀町に東京支店を開設、日本石油の特約店となる。穴水徳五郎は昭和12年3代目を継ぎ、宝製油（味の素）の大豆油を扱う東京第1号店となった。昭和33年より(株)穴水商店となる。

酒井金次郎商店は明治12年創業、大正12年に2代目が営業権を引き継ぎ酒井幸吉商店を創立した。この頃から豊年製油、スタンダード石油の代理店となり昭和27年より油市場建値委員長として標準建値設定と公正な運営に努力、業界の指針として評価された。昭和42年、3代目酒井廣の時に(株)大新に改称。

東京油問屋組合の群像

震災の翌大正13年に東京油問屋市場の会員であった大手問屋が“東京油問屋組合”を設立した。

このメンバーは、大阪屋松沢孫八商店、山十島田新助商店、駿河屋藤田金之助商店、山崎屋油店、笹屋荻原利右エ門商店、三河屋伊藤平蔵商店、大国屋飯島録三郎商店、伊勢屋鈴木嘉助商店、山イゲタ館野栄吉商店の9店であった。以下、残された資料から、これらの大手問屋の内容を紹介したい。

通称大孫の、大阪屋松沢孫八商店（日本橋本石町）は、元禄年間に大阪より江戸に進出し、漢方薬の薬種問屋としてハゼ蠟などを扱っていたが、後に油を扱うようになり江戸最大の油問屋となった。大江戸10人衆にも挙げられ、將軍家へ献上した御用金も1万両にのぼったと伝えられる。明治時代の店員数は40～50名おり、店に出入りする車力や遠方からの使い等が何時でも食事を取れるように、朝から夕方まで常に食事の用意がされていたという。また酒も「こもかぶり」が置いてあり、何時でも呑めるようになっていた。政府は明治22年に「維新前東京諸問屋商事慣例」という調査書をまとめているが、この時に江戸時代の油問屋の商売について取調べを受けたのは、松沢孫八商店の支配人・菊地治兵衛と油商・中伊右衛門であった。大孫商店が江戸を代表する油問屋と見なされていたことが分かる。この大孫商店からは、白鳥孝、小林善司（旧姓・松本善司）などが出ている。

藤田金之助商店の前身は駿河屋喜平治商店（日本橋通4丁目）であり、大孫商店に継ぐ江戸油問屋の大店であった。日本橋の高島屋の左筋向かいに300坪

の店舗を構えていた。明治に入って東京に初めて電灯がついた時、日本橋通りではボウ大・西川商店、カク万・西川商店、カク石・駿河屋の3店に灯ったことで有名になった。菜種油も扱っていたが、その特徴はローソクにあった。ローソク工場を持ち、スタンダード石油のパラフィン蠟を輸入し加工して販売した。またビン付け油も大量に生産し、柳屋のビン付け油は駿河屋の菜種白絞油で製造した。大震災で大きな打撃を受けたことは前述した通りであるが、第一次大戦後に大阪支店が思惑で買った朝鮮白綿が大暴落したことによって大きな負債を背負い、日本橋本店の地上権（当時の金額で1,000万円）の売却へと追い込まれ、さしもの大問屋も疲弊することとなった。この駿河屋からは、須賀英次郎（後の東京油問屋市場理事長）、柏原新之助などが出ている。

カネカの屋号を持つ伊勢屋鈴木嘉助商店（霊岸島）は、名前からも分かる通り伊勢の出身で、江戸時代から大孫、駿河屋と並び称せられた大手の油問屋であった。伊勢水とは深いつながりがあり、丹羽製油の久ト印や熊沢製油の一川印の菜種油も、伊勢屋が仕入れる分には伊勢屋の「手印」がすり込まれていた。一方、千葉の製油家群の商品も一手に扱うという幅広い商売を行っていた。カネカからは、伊藤金次郎、白石長三郎（大阪屋）、河合延太郎（河合商店）などが出ている。いずれも伊勢屋出身だけに菜種油については深い知識と一家言を持つといわれていた。

大黒屋飯島録三郎商店（神田多町）は東京山崎講元などを務めた江戸時代からの油問屋で、菜種油や胡麻油はもちろんのこと、綿実油は日華製油の関東における唯一の特約店として活躍した。昭和2年、「組合市場の大改築に際しても時節柄多少の非難ありしに拘らず、万難を排して理想的市場の建築を完成」（『油界百星』昭和3年10月28日中央経済社刊）したという。飯島録三郎は親子2代にわたり、東京油問屋市場の理事長を務めており、業界のリーダーとして活躍した。しかし昭和28年、理事長在任中に会社が倒産したため、理事長を同年9月5日付けで辞任することとなった。同商店からは、三和油店を創設した鈴木喜代治、鈴木直枝が出ている。

萩原利右衛門商店（本郷3丁目）の元祖萩原多兵衛は武州足立郡下笹目村の出で、寛文年間江戸に出稼ぎに出た。元禄（1888～）の頃、本郷で質と米の商いを始め、屋号を「笹屋」と称した。蔵にあった看板には「米油質両替笹屋」とあった。4代目あたりから加賀藩などの御金御用達を務めたこともあって、「金貸し笹屋」の異名で通っていた。5代目は家訓3カ条「正直は一代の宝」「堪忍は生涯の相続」「慈悲は一切の祈祷」を残している。8代目が嘉永年

間に油店を創業し、「株仲間」の復活にともない権利を買い取ったとされる。9代目を油屋の初代とし、利右衛門と改め、以後油店当主は「萩原利右衛門」を襲名することになる。9代目萩原多兵衛は明治45年に75歳で没したが、亡くなるまで「チョンマゲ」を取らず、油寄合所にも短い刀を1本ブチ込んで悠然とやってきたことから、「判官様」というニックネームがついたというエピソードが残っている。萩原商店からは人材が雲のように次から次へと現れた。熊井清一郎、山田権次郎（池田屋）、梅本治郎（梅本油店）、菅野今朝吉（三河屋油店）、寺田松之助、竹内雅次郎（三英油店）、葉岡辺幾太郎、大森四郎、中村定七、山崎多一郎（池田屋）、石川平三（石川友三商店）、河辺宇エ門（渡部油店）などである。

（資）池田屋商店の山崎（山田）権治郎は滋賀県の出身。わずかに11歳のとき、同郷出身の縁で本郷の笹屋・萩原商店に入る。明治36年、創業元禄13年の老舗「池田屋油店」を買い取り継承する。昭和6年合資会社とし、日清製油の特約店となる。昭和15年より山崎多一郎氏が代表社員となり、現在も御存命である。日石三菱特約店。氏は高輪危険物安全協会会長を30年以上、昭和43年から東京都油脂小売協組理事長を20年近く務めた。

現在の業界リーダーであるカネダ(株)の創設にも萩原商店は関わっている。「うちの祖先が本郷に野菜を売りに行った時に、その働きぶりを萩原利右衛門に見込まれ油屋を勧められたのが発端」と金田勝次東京油問屋市場名誉会長は語っている。多くの業界のリーダーが、萩原商店の周辺から巣立ったのである。

ちなみにカネダ(株)の創業は嘉永5年と古いが、現在につながる形での草創は金田定兵衛が明治3年、浅草茅町に油屋“升定”を出したのが始まり。定兵衛の長女つるが由蔵と結婚して明治38年に升由油店を開業し、金田勝次氏は由蔵の4男として生まれたが、3人の兄が相次いで亡くなった。由蔵も昭和6年にこの世を去ったため、若干16歳の勝次氏が家業を継ぐこととなった。勝次氏は戦後の東京油問屋のリーダーとして活躍、理事長は1期3年で退いたが、実質的な業界のリーダーとして油問屋の発展に尽くした功績は大きい。また長男の金田達明氏も平成10年に東京油問屋市場の理事長に就任しており、今後の活躍が期待されている。

伊藤平蔵商店（日本橋小舟町）の伊藤平蔵は、代々“三河屋”加藤長九郎商店（四谷伝馬町）の番頭を勤めていたが、明治20年に7代目加藤長九郎の跡継ぎがいなかったことから営業権を譲り受けた。その後、9代目加藤長九郎が権利を買戻し三長・加藤長九郎商店に戻っている。三長は通称であり、正式な屋号は

三河屋といい、大宮製油ミツワ印のゴマ油を毎日2～3斗販売した。秤り売りで1升買ったお客さんには、余分に1合餅1杯をおまけしたため、大いにはやったという。

江戸の本店で初期の東京油問屋組合のリーダーであった枡屋・長谷部喜右衛門商店（日本橋大伝馬町）は14代将軍の徳川家茂が日光東照宮参詣の際に腹痛を覚えたために、町人の家にも関わらず立ち寄ったという逸話が残されている。元々は木綿問屋だったのが水油に乗り出し、油が本業になったという。明治19年から5年にわたり、小倉常吉が長谷部商店の支配人を務めている。長谷部商店は明治の大きな変革を乗り切れず、大正7年頃に店を畳んでいる。

明治、大正の頃までの問屋には、優秀な番頭を婿養子にして店の後を継がせるという形が多く見られる。暖簾に誇りを持ち、その継続に強く執着した当時の問屋は、実子の相続には必ずしもこだわらず、親戚や使用人に優秀な適材がいれば、迎えて養子とした。反面、使用人の給金は安く、丁稚、小僧の間は商売を教えるという意識が強く、給金は払われず、労働時間も長かった。多くは14～15歳で小僧として奉公に出て、3～4年で中僧となり、10年ほどで能力のあるものは番頭となった。大きい店では番頭にも小番頭、中番頭、大番頭の格付けがあり、店全体の運営を任せられる大番頭は支配人と呼ばれた。番頭になると、早ければ25歳前後で独立し、店を持つこともできた。問屋によって、多くの人材を育て暖簾分けを行ったところもあれば、暖簾分けにあまり積極的でなかったところもある。東京油問屋市場の営業人の初代には、本店で10年以上の奉公を行い、その後暖簾分けという道筋を通して独立した人が多い。

脈々と今に続く油問屋

島田新助商店（日本橋小網町）の歴史は古く、延享年間の武蔵屋吉兵衛まで遡り、享和年間より代々島屋新助を号するようになった。江戸時代までは主に雑貨を扱う荒物商で、明治に入ってから「油・荒物商」になったようである。「当時の扱い商品は菜種油、胡麻油、椿油、荏油、小麦粉、蕎麦粉、素麺、干柿、雑貨は番傘、蠟そく、ランプ等であった。荷は伝馬船で河岸に着き、長い板のあゆびを棧橋に渡し、天秤で担いで蔵に運び入れました」と先代の増次郎（明治38年生まれ）は語っている（「小網町今昔」）。石油はスタンダード石油、日本石油を扱い、大正5年、ライジングサン石油の揮発油を扱う「東京貝印揮発油組合」が設立され、瀬島猪之、奥田友三郎、岩出脩三、島田新助、北村長

吉，細山太七，萩原利右衛門，加藤長九郎，伊藤平蔵等が参加した。植物油は大正5年より竹本油脂の「丸本胡麻油」を扱い始め，後に日清製油の特約店となり，今日に至っている。このように時代の流れに沿って事業を拡大していく矢先に関東大震災が起これ，島新は大打撃を被った。家族と店員のほとんどを失い，かろうじて深川の別宅にいた増次郎（当時18歳）と洋三（16歳）だけは難を逃れた。その後，兄弟は姉の養子に迎えた島田善介を後見人として，一からの再興に全力を尽くすことになる。島田増次郎は昭和26年と33年に東京油問屋市場の理事長を務め，弟の洋三（八ツ菱商事）も営業人となっている。島田善介も東京鉱油商組合の初代理事長を務め活躍した。

館野栄吉商店（現株タテノコーポレーション）の初代栄吉は栃木県の豪商館野商店の次男として生まれた。明治17年日本橋小網町に妻菊の実家の援助もあり「伊藤芳次郎館野商店」の名で店を構えた。大正年間に「館野栄吉商店」となる。初代は「儲けの大きいものは商売ではない，薄利のものが本当の商売だ」と暴利を戒めた。同時にサイトを好まず，かつ代金回収と支払いには極めて厳しい問屋として名を馳せた。この伝統は受け継がれ，石油危機の価格暴騰時，3代栄一は「適正マージン適正価格」の販売を実践した。扱い商品に生活必需品が多くなったのはそのことも関係している。2代目栄吉は明治41年に東京高等商業学校（現一橋大学）卒業後家業に入ったが，初代の長男に対する指導は誠に厳しく，住み込み店員と同様に扱われたという。2代目は近代化に努め日本橋界隈の間屋として最も早く大福帳を改め，算用簿記の導入や前だれ座り机を廃止して洋服と洋机を支給配置したと伝わっている。また大正10年日米石油設立に参画，スタンダードオイルの東京代理店として石油事業を拡大した。さらに日本で配合飼料導入の草分け事業となった日本配合飼料(株)の設立発起人となり，館野商店は地域売捌き元となった。子会社三栄商店を通して，ドイツ・バイエル社と提携し農薬の製造販売もスタートした（昭和16年）。栄吉長男の3代栄一は昭和35年に家督を相続し，亡父の意志を継ぎ(財)報農会を設立，設立基金を提供したが，生涯理事とならなかった。栄一も大豆油，菜種油の一層の普及に力を注ぎ，昭和36～41年東京油問屋市場理事長，その後全油販連会長等を務めた。館野商店は堅実な社風で信用を得ながら創業116年を迎える。

東京油問屋組合の組合員以外の当時の有力問屋・仲買で，現在も続いているのが，白鳥商事(株)，(資)大家商店，(株)大家商店，(名)森本油店，(株)三河屋油店などである。

白鳥商事は，井筒屋小野善介（小野組）の油脂部で修業した白鳥万蔵が明治

35年に浅草三筋町で開業したのがはじまりで、白鳥万蔵商店の手印「イツツ」は井筒屋出身を表すのれん分けの印である。

森本油店は森本力三が橋本油店から明治35年に独立し、弟竹三とともに大木屋商店を開店したもの。日本石油、小倉石油の特約店となったが、なかんずく小倉石油の特約店としては都下随一という評判をとったという。

奥田製油所（滋賀県能登川）の奥田家の祖は古く元禄7年に菜種油の製造を始め、近畿きっての古い製油家として知られていた。文化11年に奥田平蔵の先々代が岐阜県大垣市に営業所を開設し、カク平印の菜種油を広めた。

奥田油店の奥田友三郎は明治30年に奥田家から独立、神田鎌倉河岸に油店を開業した。翌年、日本石油の特約店となり、大正7年には日本初のサービスステーションを開設した。また、東京鉱油商組合の必要を主唱し、先頭に立って創設、理事長に選ばれた。

合資会社大家商店の大家重次郎は7代目大家角兵衛の次男として滋賀県に生まれた。明治12年に奉公先の鈴木醸造店（群馬県）を辞し、東京神田美土代町に店を持った。初めは浅野物産のタンク印石油、後にスタンダード石油、小倉石油を扱い、大正14年にライジングサン石油の特約店となった。昭和24年に東英石油（シェル石油特約店）を設立した。3代目大家重治は昭和29～33年、東京油問屋市場の理事長を務めている。

大家商店の創設者大家文蔵は明治23年滋賀県の生まれ。明治38年に東京へ出て、同郷の縁故ある大家重次郎商店へ奉公する。大正3年25歳の時に独立、牛込柳町にて植物油・雑貨小売業を始め、岩井の胡麻油、日華油脂の綿実油などを扱う。大正中頃からライジングサン石油の灯油を扱い、昭和7年現在の新宿区高田馬場に移転して、給油所を開設。戦後は出光興産の特約店として業績を伸ばした。大家萬次郎氏は全国石油政治連盟副会長、同関東支部会長をはじめ数多く要職に赴き、平成4～6年東京油問屋市場理事長を務めた。

三河屋油店は、萩原商店で修業した菅野今朝吉が大正5年に田中油店より営業権を継承したもの。田中油店の創業は天正18（1590）年まで遡るといふ。現在、東京油問屋市場で理事を務める菅野今朝吉は2代目である。

林屋油店の歴史も古く初代林磯八が幕末の慶応2年、本所石原町に「林屋」の屋号で油鑑、雑貨を扱う店を開いたのが始まり。3代目磯八の次男が母方の姓を継ぎ、小林重次郎を名乗って本所北堅河岸に専業として独立した。

（株）マスキチは文化元年、枡屋（油問屋、両替商）として創業。明治以降金田吉兵衛商店、枡吉油店を経て昭和43年マスキチとなる。